新樹

新樹

大佛次郎自選集　現代小説　第9巻

朝日新聞社

大佛次郎自選集　現代小説
第九巻　新樹
全十巻・第十回配本
一四〇〇円

昭和四十八年七月十日発行
著者　大佛次郎
装幀者　原　弘
発行者　岡見　璋
印刷所　明善印刷
製本所　松岳社
製函所　加藤製函

発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

0393-240139-0042

大佛次郎自選集

現代小説　第九巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第九巻目次

新　樹

新

樹

人間の中

数寄屋橋公園と言って猫のひたいのように狭い道端の広場だが、ベンチに腰をおろして、袋のパンをつかみ出しては食いながら銀座と日比谷をつなぐ鋪道を歩く人通りを眺めていた青年がある。

暖い日和が続いた冬の日曜日の午後で、芝居か映画の一部がはねた時間のせいもあろうが、たいへんな人出で、ゴー・ストップの信号に抑えられて、重なり合って氾濫するかと思うと、一度に車道に流れ出て、つながって通る。大都会では珍らしくない雑沓なのだが、大野木公平——と言うのが青年の名だったが、新らしいものでも発見したように感心して眺め、パンがなくなった袋をまるめて、てのひらに握ってからも、まだ笑顔を放さず、人通りを見まもっていた。

「やれやれ、これは、まるで出水した川のようなものだな」

青年は、筋肉の厚い胸の奥で、こうつぶやいて、両脚を靴ばきのまま、上げて膝を抱く姿勢に変った。二十七歳の若さで、南国の和歌山の熊野生れで、肉づきが厚く血色のいい顔立であった。美青年だが、帽子のない頭の髪の毛が、すぐにも理髪店へ行った方がいいくらいに長く伸びて、かつらでもかぶっているように見える。そう言えば大野木公平は洋画を学校で勉強してから、現在は新

旧の劇場の舞台装置の助手をして生活している。自分で考えても彼のような田舎者は、何を仕事にしても東京で食ってさえ行ければ、満足なのであった。慾のない善人であった。

東京の鋪道に、きれ目のない通行人の流れは、尽きない数で彼を面白がらせ、故郷の海岸にある町まで、鉄道の駅から山を降って行く道路の空白な静けさを思い出させたところであった。

日に僅か数回の汽車が着いた時に十人足らずの男女が降りて、大きな声で話しながら通るだけで、あとは、しんかんと、埃道に南の日が照るだけなのである。人が通る時に見て、よその土地の人間を見つけるのは二人か三人で、あとは全部、どこの誰と顔見知りだから一緒になれば塊って話しながら、坂を降りて来る。知らない人間はないのだ。それが埃の白い地面につく影と一緒に通ってしまうと、あとは、公平の故郷の人たちの習慣で、椿の葉で煙草を巻いてすったのを捨てたのが、みの虫のようにまるまって落ちているのを見つけるだけなのだ。ウグイスが多く、ほかの山の小鳥の声が、よくひびく道である。海の色が崖の下にひろがって、しかも、その海には時折、ほんものの鯨を見かけることがあるのだから、のどかなこと、何年か前に長寿村として新聞に記事が出たのも別に意外でなかろう。

東京のこの人出は、こっけいなくらいのものだ。青年は、こう思いながら、東京の若い女たちがファッションだろうが実に種々雑多な服装をして歩いて来るのを、目を輝かして追っている。

「まったく、こうして見ていて、赤毛のブリジット・バルドオの贋物が、一体、いくたり出て来るか、勘定して見たら面白いだろうな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

皮肉に見ているのでなく、感心しているのだった。

「いっそ、東京中の贋バルドオを一人残らず集めて、並べて街頭行進させたら、……東京のことでないような気がするだけでなく、見るだけで気味が悪いかも知れないぞ。髪の毛が唐もろこしのようで、顔がつやがなく白くて、目ばりに青い絵具を入れてて、ラジオの落語で聞いた一つ目小僧の村へ行ったような、おっかないことになるだろうな。けれどあの化粧をしている女は、自分だけが、バルドオの真似をしてると信じてるのか？　仲間がいると思って安心して、あんな風にしているのか、とにかく不思議だな」

公平のたぐっている思案の裏側に、まったく違う性質の期待が動いていた。ぼんやりと白い花のことを想っているようだった。意識の真中には出て来ないが、どこかに白く、しっとりと匂うように在るのを知っている。

いや、それは一輪ではなく、同じ花の二輪であった。一つは、ゆたかに花一杯に咲いて匂い、もう一輪は小さく、これから咲きかけて、なかば開いている蕾の花の感じであった。母子だろうか、姉妹だろうか？　どちらとも公平はまだ知らないし、どこの何と言うひとたちかも知らない。ひろいひろい東京のことだが、この鋪道の際限ない人の流れの中に、ひょっとしてふたり連れでなくとも、そのどちらか一人でも、公平の前に現れて来ないとも限らない。

さがしに出て来たわけでもないが、これだけの人通りを見ていると自然と、そう考えて来るのであった。今度、見つけたら、後をつけて行って、どこの、どんなひとか覚えてやる。

大野木公平は、それから先のことは何も考えてなかった。期待もしなかった。舞台装置の助手風情が二人に接近して親しくなったり、あるいはそれ以上に結ばれることがあろうなどとは、彼は考えてない。

「貴族なのだ。むろん、身分の貴族だと言うのでない。そんなものはなくなっている。だが、精神の貴族とか、美の貴族と言うものは出て来る可能が人間にある。あのふたりが、それに近いのだ」

誰か、後に来て、ふいに公平の肩をつかんだ。

「きんぺえ」

九鬼良助が、背の高い体格で、笑いながら立っている。クラスが同じだが、商業美術を専門にして学校を出るなり、はしこく実社会に飛び込んで、公平などが及びもつかぬ収入をつかんで羨まれている若者だった。

「お前か？」

九鬼良助は毎日事務所づとめをしているのだが、手入れのいい、ふさふさとした長髪に、どこで買ったのかビロードのジャケットを着込んで押出しから美術家らしい風貌でいる。

「何をしているのだ、こんなところで」

「人を見てたのだ。通る人間をさ」

「何かさがしてたのか」

振向くと、スラックスをはいて立っていた若い女の肩をつかまえて、公平の前に押出した。
「紹介しよう、白木てる子嬢、プロデュサーって言うのかテレビの、あれをやってるのだ。おれと商売がつながってる」
公平は、良助がドンファンなのを知っていた。白木てる子は、目立って色の白い、卵のようなすべすべして光る皮膚をした可愛らしい顔立であった。おとなしく良助に寄添(よりそ)っている。
「暖いなあ。歩いて来ると汗が出る」
良助は公平と並んでベンチに腰をおろした。
「何をしてたんだ？　人を待ってたのか？」
「いいや、用がないのだ。来月の芝居の出し物がきまるまで、スケッチをしたり展覧会を見て歩いてるだけだ。そうだ、ブリヂストン美術館にギリシャ彫刻のすごい首が来ているぞ」
良助は学校を出ると、すぐにギリシャ彫刻のような古いものに無関心で冷淡になった男だった。急に思い出したように、話をほかに飛び移した。
「閑(ひま)だったら、このお嬢さんを、日比谷座に連れて行ってやってくれよ。すごく入ってる映画らしいが、おれア興味ないんだ。今、行ったら満員で五時からのを待たないと入れない」
てる子が、不平そうに言った。
「いいわよ。あたし、ひとりで」
「いや、公平さんともつき合って置けよ。芝居の仕事をしてるんだ。それに、なかなか親切な男だ

よ。おれなんかより若いのに真実のある紳士さ」
「いいわ。ごめいわくよ。あたし、お友達の店で閑をつぶしてから、ひとりで行くから、九鬼ちゃんなんかに頼まない」
「暗くなってから、映画を見に入るなんて、ばかげてらあ、行くならあしたの午後か。今日はやめだ。きんぺえ、お前、代りに行ってやれよ」
「いいわよ。頼まないから」
白木てる子は、歩き出して青年たちから離れて行った。
煙草をくわえた九鬼は、とめもしないで目で、てる子の行き方を追っている。
「おこらせたんじゃないか?」
「いいさ。だが、きんぺいさん、お前さん、相手をしてやれよ。ふたりになると、あれで妙にセキシイに見えて来るよ。湯気のように皮膚から発散するものがあるんだ」
てる子がまだ若過ぎるので、公平は疑問にした。
「プロデュサーって、何をするんだ」
「今のところ、スポンサーてえのか、広告主をつかまえる仕事だろう。可愛らしい顔をしているからな。会うと、じゃけんに追払うより、閑つぶしにつかまえて話す気になるだろう。つき合って見ろよ。酒だって、やるぜ、君のアミに、ちょうどいいと思ったんだ」
「あいにくとだが」

公平は、誇りと謙遜とを兼ねて、無器用に答えた。
「僕のポケットは、いつも空だ。お茶も飲めない日が珍らしくない」
「いいじゃないか？　彼女に払わさせれば。そう言う彼女をさがすことだ。君に仕事を持って来て出世を早くさせてくれるような奇特な奥さん方だって、世間にはなくもない。君はおとなしいから、どこか、そんな風な誘惑を人に感じさせるところがあるよ。だが、歩こうか」
誘って鋪道の人波の中に加わりながら、九鬼の達者な口は動くのをやめなかった。
「君は野性的で、どこか、おっとりして急がないようなところがある。おれ達のように、はしっこくないし、すれたように見えないのだ。どうも人生は、せちがらくなっても、おごる奴と、おごらせる奴と人間が二種類に決まってしまうものらしいのだ。おごる奴はいつも人におごってるよ。おごって貰う奴は、いつも、人におごらせてる。おれは間違うと、おごる役になりそうだから、最初から精確に自分の分だけ払うようにしているのだ。君はどっちかと言うと、おごって貰う方らしいな。好かれるのだろう。自然の人徳なんだよ。利用出来る間に利用しないと、チャンスがなくなってしまうことだってあるんだぜ」
年齢は二つぐらい九鬼が上だろうが、いつの間にか、そんな意見を組み立てているのを大野木公平は呆れて眺めるのだ。
同じ方角に向って歩き出したので、前を歩いていた白木てる子が気がついて待って、また一緒になった。

「映画は公平さんと行けよ」
九鬼は頭から命令でもするように、てる子に、こう言い渡した。
「公平さんが、おれの代りをしてくれるよ」
九鬼の気持はどこに在るのか？　公平が拒もうとするのに、てる子に見えぬよう千円札を隠して手渡した。こちらの懐中が空なのを知っているのだった。
返そうとして争うのも、若い女の前では拙いので、うっかり受取ってしまったのが、てる子を映画に連れて行くことに成った。九鬼には、回転のゆっくりした公平の頭では予測がつかない計画があったのかも知れない。
「では、おれは失敬するぞ」
と、軽快に九鬼は逃げ出すのに成功した。
「ポスターの注文が取れそうなのだ。梅見の観光ポスターだけれどね」
「あとで、どこかで会わない？」
と、てる子が言った。
「映画が終ったら『田岡』にでも行ってるわ」
「それまで待ってられるものか。仕事だってある」
公平は、てる子と自分だけになって、重荷の気分であった。映画のスクリーンの前に腰かけてしまえば口をきかなくて済むのだが、それまで時間を待って町を歩くのは苦手であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com